

<前回>日本キリスト教の歴史的概観

(0)「地平モデル」から「日本／キリスト教」へ

- ・「日本」という地平：宗教文化 → 東アジアの宗教文化圏：構造とプロセス
儒教・漢字
- ・「キリスト教」という地平：近代の宣教の二つの波、近代化とキリスト教
- ・地平融合の二つの段階 → これが現在を規定する
キリシタン時代、そして幕末・明治以降

(1)日本の宗教文化

0. 「問い」としての世界的に特異な日本の宗教状況

- ・なぜキリスト教は土着化しないのか
- ・無宗教という日本人の自己意識

1. 東アジアの宗教文化圏の共通構造：儒教文化圏、漢字文化圏

重層的な宗教多元性：基層／民衆宗教・民俗宗教／国家宗教・世界宗教
遠近構造：身近なものを通して遠いものに関わりを持つ

阿満利磨『法然の衝撃——日本仏教のラディカリズム』人文書院、1989年、58-62。

2. 古代世界の緊密な相互交流＝形成プロセス → 統一文化圏の形成

3. 東アジアにおける宗教文化の相互交流の存在

4. 宗教文化の複合性：複合体としての儒教、神道

5. キリシタンの日本の宗教文化における意味

「キリシタンの歴史はザヴィエルが来日した一五四九年からわずか九〇年、一世紀にみたない短期間の歴史である。しかしながらそのキリシタンが日本におよぼした影響はまことにはかり知れないほど大きい。いうまでもなくその最大のものは鎖国であるが・・・」(古屋安雄／大木英夫『日本の神学』ヨルダン社、1989年、48-49)。

江戸幕府の宗教政策の基礎、近現代の日本人の宗教観を規定することになる。

身分社会(封建社会)の秩序の安定化に向けて宗教の民衆化を統制する政策
そのためにキリシタン禁制が利用される。

宗門改めと寺請制度：仏教・寺を通じた民衆の管理

転びキリシタンは仏教に帰依したことの証文を要求される。

宗門改帳(宗旨人別帳)：領民の宗旨を登録した帳簿の作成

→ 近世的な「家」を掌握する役割、幕藩領主が把握すべき「小農」を土地に縛り付ける機能。

6. 寺請制度＝日本型の政教分離、西欧的な政教分離への適合性

政治に組み込まれ、政治的な危険性を除去された宗教

公から分離され公を補完する宗教(政治を補完する宗教)

公／公共／私、国家／市民社会／家族

公共圏 親密圏

7. 明治：国民国家形成という課題、二つのベクトル

A「国民・民族→民族主義、統合の原理としての天皇制、神道国教化政策」

B「国民・市民→近代主義、市民社会、自由民権運動」

↓
「明治憲法／教育勅語」（「明治憲法と教育勅語は一組のセットであって不可分離」
（古屋、97）

↓
矛盾の解決としての「神道≠宗教」論
民族の魂としての天皇制と信教の自由の両立

↓
特異な宗教理解に基づく、無宗教という日本人の自己意識、

（2）近代化の二つの波とキリスト教

9. 重層構造に対するキリスト教

- ・ 仏教的な仕方での日本化を行うのか（鈴木大拙の日本的靈性論に対応して）
- ・ 現代日本文化の中のキリスト教と教会文化のキリスト教

10. 天皇制に対するキリスト教

11. 井上章一「思想史と宗教史の、その裏側は——近代日本のキリスト教受容をめぐって」
（『岩波講座 日本思想 第六巻 秩序と規範』2013年）。

12. 文化としてのキリスト教はキリスト教自体にとっていかなる意味を有するのか。

3. 明治時代のキリスト教の問題

（1）明治初期のキリスト教

1. 明治：国民国家形成という課題、二つのベクトル

A 「国民・民族→民族主義、統合の原理としての天皇制、神道国教化政策」

B 「国民・市民→近代主義、市民社会、自由民権運動」

2. 岩倉使節団とヴァーベック（Guido F. Verbeck. フルベッキ）

「フルベッキという日本の呼び名で、ヘボン（ヘップバーン）とともに知られているが、一八五九年に最初に来日したオランダ改革教会の宣教師の一人」（古屋安雄『日本のキリスト教は本物か？——日本キリスト教史の諸問題』教文館、2001年、21頁）。

「特に明治政府にはよく知られていた宣教師」

ヴァーベックが「岩倉使節団」（1871-73. 政府要人たちを欧米諸国視察に派遣。岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳など、総勢約 50 名。津田梅子など約 60 名の留学生も同行）の原案を作った（高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』1978年）。

「使節団の目的は視察のほかに条約改正であったが、実際にしたことはキリシタン禁制高札の撤去」（1873 / M6 年）、「それを企画したのがヴァーベック」（23）

「これからもっと調査すべきは、ヴァーベックと森有礼の関係」「岩倉使節団が旅行しているときに駐米大使で、「信教の自由」を英語で書いている」。

3. 「キリシタン禁制の高札撤去と前後して、日本の各地で、キリスト教を信じる青年たちのグループが生じた。特に、横浜と熊本、札幌の3つのバンド（band=一団）が有名」（『1冊でわかるキリスト教史——古代から現代まで』日本キリスト教団出版局。落合建仁、209頁）。

3. 「帝国憲法発布ごろまで」「キリスト教はまず条約によって守られた居留地で発足した。次の段階では、ここから日本各地に進出」「三つのタイプ」（高橋昌郎『明治のキリ

スト教』吉川弘文館、2003年、64頁)。

「A 学校に、宣教師が語学その他を教授する外国人教師として招聘され、赴任したのちに伝道を始める。

B 居留地である横浜・東京・神戸などでキリスト教に入信した人が、自分の郷里に帰って伝道する。

C 居留地に居る宣教師が直接に、居留地と貿易などで関係のある地域や、距離が近い地域に出張して伝道する。」

「明治一〇年代から、旧城下町を主として農村にまでも教会が設立」

「明治一九年から明治二二年の憲法発布ごろまでに欧化主義の波に乗って、都市においてめざましい飛躍」

4. 「周知のように、わが国最初のキリスト者は、武士階級しかも佐幕派の武士であった。・・・したがって、日本のキリスト教は、まず貧民階級に入った中国や韓国のキリスト者と違って、きわめて知的なキリスト教であった。」(古屋、24)

「なぜ Christianity を基督教と翻訳したのであろうか。Religion を一八五八(安政五)年の日米修好通商条約で「宗教」と翻訳したので、「教」をつけたのかもしれない。」

「基督道ではなく基督教となったために、日本の基督教は道よりも教えが重視されるようになったのではないか。・・・ここに知識階級であった、武士階級の特徴を見るのである。」

(25)

牧師：「師」→「先生」

説教：「教」。「説教は誰にでも分かるような平明なものでたはならない。・・・先生の説く真理は深ければ深いほど難しいものなのである。」(27)

↓

愛国的なキリスト教。ただし、「国」は「・・・藩」から「日本国」へ移行する。

5. 「公会主義から教派主義へ」(29-33)

「第一期」(安政六年(1859)～明治一四年(1881))。「キリスト教の移入期」「教会の設立」(海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1970年、132-137頁)

「日本の教会の発端を考えると、明治五年三月に設立された「横浜公会」を取り上げるのはもっとも妥当であると思う。この教会「公会」はたしかに長老主義を採用してはいたが、曲がりなりにもいかなる教派にも属せずといった意味での無教派主義をとった。したがってそれは具体的に各教派の教団ミッションから組織的、経済的に独立する可能性と同時になんらかの形で教派の枠を超えた協同ないし合同組織になる可能性を内蔵したものであった。」

「「公会」の方針は比較的日本のキリスト教徒のあいだに好感をもってむかえられた結果、それは破綻したものの、そののちさまざまな点で「公会」の線に戻ろうとする動きが見られ、実際教派の線か公会の線かで揺れ動いたのであった。」(137)

「日本キリスト教史が、アジア諸国のキリスト教史と比べて独特なことは、日本という国が欧米諸国からの独立を志向したように、独立精神が旺盛であったことである。・・・公会主義が教派主義へと変わるの、後から来た宣教師たちの影響だったと言われる。」(古屋、29)

(2) 明治前半

6. 「教会の好調な進展」(大内、194。Ritter: A History of Protestant Missions in Japan, 1890)

安政6年(1859): 教会数0、日本人教会員数0

明治4年(1871): 0、10

明治5年(1872): 1、16

明治9年(1876): 16、1004

明治15年(1882): 93、4367

明治20年(1887): 221、18019

明治22年(1889): 274、28977

6. 自由民権運動、地方都市のキリスト教

『高知教会百年史』「高知県にプロテスタントが伝えられるに当たって、民権運動の指導者たちは、宗教そのものとしてまた信仰としてのキリスト教を、始めから受け入れた上での導入ではなかったのであって、当時の中央専制的な薩長藩閥政府に対抗するための、自由民権運動の思想という点に共鳴して、キリスト教を導入しようとしたものと考えられる。・・・しかしその後、・・・その指導者の間に、社会的な側面だけでなく、キリスト教の持っている宗教的生命に、次第に目が開かれていったと思われる。」(高橋昌郎、125)

7. 工藤英一『明治期のキリスト教 日本プロテスタント史話』教文館、1979年。

「職業的な伝道者だけではなく、第一期の信徒は、聖日の礼拝が終わると、弁当をもってすぐ町や村へ出かけ、農村であれば野良で働いている農民といっしょに弁当を使いながら、聖書の話を一生涯懸命に話しかける。このような伝道の熱意に燃えた教会が、第一期の教会の姿であった。それは決して誇張ではなく、「伝道する教会」といった点に、第一期のキリスト教の特徴があったのです。」(19)

「明治初期におけるキリスト教受容の社会層が、広義の農民層であった点」「従来の研究では旧武士層による受容が強調されてきましたが、実証的調査の成果は、むしろ幕末期から農村に形成された比較的富裕な農民層こそ、明治初期のキリスト教を支える社会的基礎であることを明らかにしています。」(45)

「維新後から明治二十年にかけての日本における資本主義の発展過程は、いわゆる「下からの」形成と「上からの」育成との相剋として理解できます。・・・「下からの」資本主義の形成は、明治二十年の後半に至って「上から」のそれによって挫折をよぎなくされました。「富国強兵」「殖産興業」のスローガンのもとに、政府によって強力に保護育成された資本主義は、「官業払下げ」の過程を経て、当初政商を、やがて財閥を中心とした資本主義として確立をとげました。」(50)

工藤英一『社会運動とキリスト教——天皇制・部落差別・鉱毒との闘い』(日本YMCA同盟出版部、1972年)。

『日本キリスト教社会経済史研究——明治前期を中心として』(新教出版社、1980年)。

I 明治初年の士族層とキリスト教

1 初代日本プロテスタントの社会層

2 日本社会におけるキリスト教受容の特質

3 明治初年における士族のキリスト教受容——木村熊次の場合

II 明治の農村社会とキリスト教

- 1 明治初年における先駆的農村教会の成立
- 2 明治初期岡山県におけるプロテスタント教会
- 3 明治後期農村教会の動向

III 明治の地方産業とキリスト教

- 1 群馬県島村教会の形成と蚕種業
- 2 伊予綿ネル業の創始とキリスト教
- 3 赤心社の創業とキリスト教

(3) 明治後半

8. 転換点、明治憲法 1889/M22 / 教育勅語

ベクトルはAへ。

9. キリスト教の大都市回帰、農村から都市、大都市へ

「日本社会でも共同体というものが根強いのですが、伝道に関しては、ひとりひとりが個人的にキリスト教を受容するという形をとっています。」(工藤、20)

「明治三十年代以降、キリスト教の受容が中産階級に集中」(26)

「第二期」「教会や信徒の数の増加」「大都市や地方都市の場合では県庁所在地のような都市」、「日本全体から見れば農村への伝道は忘れられ、都市内部でいえば、労働者への伝道も必ずしも十人にはおこなわれなくなったのです。」(27)

10. 日清日露戦争 1894/M27、1904/M37

「明治政府は、戦争を経るなかで、異国の宗教であるキリスト教をはじめ、「淫祠邪教」の天理教などを戦争体制へ動員することに成功し、民心教導の一翼として活用した。」(大濱徹也『庶民からみた日清・日露戦争——帝国への歩み』刀水書房、2003年、208頁) 佐藤清臣ですら、「日清・日露の戦争を経るなかで、国家への屈服をとげ、国家の走狗として老いの生涯を戦意昂揚をめざした民衆教化にささげたのであった。」

「民衆は、このようなさまざまなかたちでなされる教化活動により、戦争への積極的協力を促され、国債に応募し、勤儉貯蓄にはげんだのであった。それは、あまりにも重い「愛国」の業にほかならず、民衆が国債に応募したのは「愛国の名に強迫されて出金」したもので、「愛国は貧乏人によりては実に重荷なり、痛苦なり、衣を薄くし食を減ぜざれば出来ざること」(『平民新聞』明治三十七年三月六日) だった。」(209)

↓

繁栄による社会矛盾。

11. キリスト教の社会問題との関わり、その二面性

- ・社会福祉とキリスト教あるいは知識階層に向かうキリスト教
- ・社会主義とキリスト教

12. 「歴史的に言うと、学問領域としての社会福祉学は別として、社会福祉実践は、原初形態において、宗教、とりわけキリスト教の不可分であった。このことは欧米では当然であろうが、実は日本でも明治以降の近代化の流れのなかでキリスト教徒社会福祉の関係は重要であった。」(木原活信「社会福祉におけるスピリチュアリティ」(小原克博・勝又悦子編『宗教と対話——多文化共生社会の中で』教文館、2017年)、41頁)

「少数派であるキリスト教徒たちが、福祉界の先駆者の大半を占め、日本の近代の社会福

祉を基礎を担ったことは特筆すべきである。」「神の義（ヘセード）として社会的正義を実現させるべく、アガペー的愛に献身した人物」「たとえば石井十次の岡山孤児院、救世軍の山室軍平、留岡幸助の北海道家庭学校」（45）

「しかしながら、戦後の福祉国家体制により、宗教と社会福祉は分断され、「対話は断絶」した。」

13. 「日本で最初の社会主義の政党である「社会民主党」が結成されたのは、そして即刻解散させられたのは、一九〇一（明治三四）年であった。その結成メンバーが安部磯雄、片山潜、木下尚江、河上清、西川光二次郎、幸徳秋水の六人であったこと、そのうち秋水を除くすべてがキリスト教信者であったことは知られている。」（古屋、91）

「この教会の保守性こそ社会主義から離れたゆえんであろう。」（109）

14. 田村直臣の「日本の花嫁」事件。自己規制（あるいは付度）するキリスト教の始まり。「田村直臣」（1858-1934）

「洋行帰りの彼は引っ張り尻で、ただちに『米国の婦人』を出版した。これは日本のアメリカの女性の相違を論じ、彼の持論である男女同権論を展開したものであるが、非常に歓迎された。私の言う「国際主義」の時代だったからである。ところが、一八九二（明治二五）年、彼の渡米に際して同じ内容のものを *Japanese Bride* と解題して、アメリカで出版するや、大問題となった。「国粹主義」の反動の時代になったからである。特に教会において裁判問題になり、しかも植村と井深の怒りを買って除名されてしまった。この反動期に牧師のくせに伝道に反する言論は赦せないという心情であったろう。」（119）

15. 明治後半のキリスト教の直面した壁

- ・ベクトルBへの展開の圧力 → 自己規制（あるいは付度）するキリスト教
- ・新神学問題と教派合同の破綻

↓

二〇世紀大挙伝道（1900（明治三三）年）の試み

<参考文献>

1. 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。
2. 中央大学人文科学研究所編『近代日本の形成と宗教問題』中央大学出版部、1992年。
安岡昭男「岩倉使節と宗教問題」267-299頁。
3. 西田毅編『近代日本のアポリア——近代化と自我・ナショナリズムの諸相』晃洋書房、2001年。
4. 森岡清美『明治キリスト教会形成の社会史』東京大学出版会、2005年。
5. 小見のぞみ『田村直臣のキリスト教教育論』教文館、2018年。